

2019年横浜ナザレン教会受難節第三主日礼拝説教  
「命への道」ルカ福音書9:18～27

【聖書箇所】

18 イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。そこでイエスは、「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。19 弟子たちは答えた。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もいます。」20 イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神からのメシアです。」21 イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、22 次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」23 それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。24 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。26 わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子も、自分と父と聖なる天使たちとの栄光に輝いて来るときに、その者を恥じる。27 確かに言っておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国を見るまでは決して死なない者がいる。」

1 分水嶺

私達は、日々の現実に悩みつつ生きています。何故悩むのかと言えば、私達には物事の全体が見えてないから。今自分が置かれた位置は全体から見ればどの位置にあるのか、自分のしている事に何の意味があるのか、この悩みはいつまで続くのか。それらを知ることができたら、私達の日々の重荷も随分軽くなるでしょう。高い山に登り、四方を見渡すように、自分の歩む道の彼方にあるものを見渡せたなら…と願わない人はいないのではないのでしょうか。

今日の聖書テキスト、先週から引き続いてルカ福音書9:18～27です。こここれに続く主イエスの「山上の変容」をルカ福音書全体の『分水嶺』と呼んだ人がいます。山を流れる川の流れが、一方は山のこちら側、もう一方は山のあちら側と分かれる地点を分水嶺と言いますが、今日の聖書箇所は、イエス・キリストの物語の中でそのような地点だということです。つまり、今までは見えていなかった山の向こう側にある福音書全体が向かう目的地が描かれた聖書箇所なのです。ルカ福音書から主日ごとに御言葉を聞いてきた私達の視界が開けて、見えてきたものとは、いったい何なのでしょう？それをご一緒に見ていきたいと思えます。

## 2 一人祈る主とともにいる

「主イエスは一人で祈っておられた。」とあります。おそらく、ご自身の時が近づいたことを感じた主が、エルサレムへの旅立ちについて、父なる御神と対話しておられたのでしょう。祈る主の傍らには、弟子達がいました。今日の場面の前の場面、三月三日に取り次いだ聖書箇所は、僅かパン五つと二匹の魚で五千家族の人々がお腹いっぱいになった…というエピソードでした。ここで主イエスが与えてくださる恵みの大きさは勿論であります。尚、それに加えて私達の心を捉えるのは、十二使徒の姿です。主イエスが無から有を生み出す唯一の御神の力をお持ちである事、その力と権能をご自身の満足のためには使わず、人々の不足を満たすためにお使いになることに十二人は驚きつつも、大いに喜んで、イエス様が次々に手渡すパンと魚を受け取り、人々に配りました。そうして十二人は主イエスによって、仕える者と変えられたのです。その後、群衆は去っていきましたが、十二人だけは主の傍らに、共にいる事を選びました。この十二人の姿は、今日、主イエスを慕い父なる神を礼拝する為に集まってきた私達の姿と重なるように思えます。

## 3 群衆の意見

そんな弟子達に、主は尋ねます。「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか。」群衆とは、主イエスからパンと魚で養われた五千家族の人々でしょう。パンを食べ満腹して満ち足りて、促されるままそれぞれの家へと帰っていった人々です。十二人と違って、群衆はイエス様の事をよくは知りません。しかし、イエス様の言葉と行いを見ていて、「この人はどこか我々とは違う。」と感じ、主イエスの正体について噂していたのでしょう。「きっと洗礼者ヨハネが生き返ったんだ」「いや違う、私は洗礼者ヨハネを見たことがあるが、彼はヨハネとはまるっきり違う。」「終わりの日の直前にやってくると預言されているエリヤではないか？」「終わりの日がそこまで来ているというのかい？ そんな兆候はないじゃないか。誰か昔の預言者が生き返ったのではないのかい？」というふうに。

洗礼者ヨハネやエリヤ、誰か昔の預言者のように、ローマ帝国や領主ヘロデを、神の鋭い言葉と超人的な行いでへこませてやっつけて欲しい…という願望を抱いて、イエス様を見ていた当時の群衆。それは現代の群衆にも通じるものがあります。人々は自分勝手な願望を抱き、それを叶えてくれそうな人物のもとに集まり、祀り上げもてはやすのです。

## 4 人類最初の信仰告白

しかし、仕える者とされ主の傍近くに共にいた十二人は、主を預言者だとは言いませんでした。ペトロが十二人を代表して答えます。「神からのメシアです」。メシアとはヘブライ語で、“神から油注がれて特別に選ばれ聖別された人”という言葉で、昔は祭司長等にも使われていましたが、イエス様の時代には、「神のみもとから終わりの日にやってきて、全世界の人々を審き、新しい世界を造られる方」と変わっていました。ローマ帝国に支配され搾取されているイスラエル民族の最終的・究極的な救い主だと考えられていたのです。十二人は、自分たちとそう変わらない風貌のナザレ人イエスの中に、自分たちを救い出す究極的な力を見出しました。そして、まっすぐに、ナザレ人イエスこそ、神のメシア、ギリシャ語では、神のキリスト、救い主だと告白したのです。ペトロの告白は、人類最初のキリスト告白、イエスをキリスト、救い主と呼ぶ告白であります。

## 5 最初の十字架・復活預言

そのペトロの信仰告白の直後、主は、初めて、ご自身の行く末を弟子達に告げます。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」(22節)。これこそ、分水嶺に達した時、見えてきたものであります。それは主イエスの受難と甦り—十字架と復活です。この十字架と復活預言を、主は、キリスト告白した十二人にのみ告げたのです。信仰告白した我々にも今日、また新たに告げておられます。その内容は、あまりに衝撃的で、当時の弟子達は主が何を言われているか判らなかつたでしょう。現代の私達は聞き飽きた事かもしれません。ですが、私達の信仰に最も大切なことです。

“長老、祭司長、律法学者たち”というのは、当時の神の民イスラエルの最高法院、サンヘドリン、日本で言えば国会と最高裁判所をあわせたような会議の議員であった人々。そんなイスラエルの民の指導者達、宗教的な権威者達から、「排斥され殺される」と主イエスは、初めて告げました。「排斥される」というのは、「適格者と認められずに不要な者として棄てられる」という意味があります。人々は自分たちの望む救い主の像を勝手に主イエスに押し付ける、だが、主イエスが自分たちの願望とは全く異なる救い主、却って自分たちの宗教的権威を脅かす者であると分かり、「お前は不要だ」と言って、ゴミのように捨て去るということです。いや、捨て去るだけではない、「自分たちにとってはお前は邪魔だから、抹殺しよう。」と殺してしまう、滅ぼしてしまうということです。人が神を裁く…なんとも恐ろしい姿です。

ですが、その恐ろしい姿は、イエス・キリスト、神を忘れた時の私達の姿そのままです。私達も又、主イエスに自分達の願望を押し付け、それが叶わないと、「イエスにも神にも力はない」、「やっぱり神なんていないじゃないか、イエスは

2000年前の歴史上の人物に過ぎない」と、自分の中から、主イエスを追い出し、捨て去り、殺してしまおう。それが私達人間の現実です。

## 6 キリストの十字架 一人の罪と神の愛のあえる所

私達の根本的な罪、天地万物をお造りになり、私達人間一人一人をかけたがえのない存在として愛する天の御神を、神と出来ず、自分たちの理想を神に押し付けることで自分が神となろうとする罪。その罪の姿が十字架と復活の予告の中にはっきりと現れています。

ですが、神は絶対的に正しいお方。そんな私達の罪を見過ごしには出来ません。罪ある私達を滅ぼすしかないのです。その一方で、私達一人一人をのかけがえのない者として愛してくださっている。だから神は、ご自身のもっとも大切な独り子、一心同体の子なる神を、一人の人間として、私達の中に宿らせて、もっとも悲惨な刑―十字架に架けられたのです。全ての人間の罪を償うためでした。愛する御子を十字架に掛けることをお許しになった時、父なる神は、苦しみのうめき声を挙げられたことでしょう。

先ほど、讃美歌262番「十字架のもとぞ」を共に賛美しました。その歌いだしは、「十字架のもとぞ、いとやすけき。神の義と愛のあえるところ」であります。しかし神の義と神の愛は昔から一つです。ですから、その歌詞の正しい意味は次のようなものです。「十字架のもとぞ、いとやすけき。神の義なる愛と、人の罪の出会いところ」。まさにこの十字架は私達の深く大きい罪とそれをはるかに凌駕する神の義なる愛のあえるところ。そこに、私達の救い主イエス・キリストは、もっとも呪われた者として釘で磔られたのです。神を神とできずに背いてしまう深い私達の罪。その罪を赦すために子なる神を磔にするほどに深い神の義なる愛。この現実の前に立たされた時、私達の言葉も想いも絶えて、ただただ圧倒されるしかありません。そんな人の言葉が絶える所、人の思いが死ぬ所に立っている救い主を磔にした十字架です。

どうして、救い主の十字架だと私達人間にそれがわかったのか。それは、イエス様が三日の後に甦られたからです。正確に言えば、父なる神によって甦らされたのであります。イエス様が十字架上で無残に磔られ死んで墓に葬られただけでは、私達は、この方が救い主だと知ることはできなかつたでしょう。しかし、父なる神により主は三日後に甦らされ、弟子達の前に現れました。だから、私達は、この方が子なる神であり、我々の救い主であることを知ることができたのです。そして、主イエスは、神の独り子、子なる神であるという事も示されました。

主イエスは、この十字架の受難と甦りの出来事は、徹頭徹尾神のご意思であることをはっきりと述べておられます。それは、私達の聖書では、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」の「なっている」と訳されている部

分から分かります。このもともとのギリシャ語は、人ではなく神の強い意志をあらわす言葉が使われているからです。自分の苦しみと受難、そして三日後の復活は、人々の意志ではない、永遠の昔からの神のご決断、神の強い意志であるということを主イエスは、はっきりと話されておられます。

## 7 信従の勧め

そして主は十二人だけではない、弟子達全員に言われます。ここに集う私達全員に主イエス・キリストは仰います。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。24 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。」

実は、私はこの言葉が本当に苦手でした。私達に自己否定、自己放棄を強要する言葉で、到底受け入れられない…初めてこの言葉を読んだ時、そう思いました。イエス様がそんなことを言うはずがない…とさえ考えました。しかし、信仰生活を続け、自分の罪の深さ、大きさに気づくようになって、その考えは大きく変えられました。私は自分の理想を救い主に押し付けていた、自分自身を変えずに、私の耳に心地よい話を話してくれる救い主の像をイエス様に押し付けていたのです。一種の偶像礼拝です。このような過ちを犯すのは私だけではないでしょう。しかし、私達が作り上げた偶像に、私達自身の命を滅びから救い出す事はできません。

私達人間は、自分で自分のことが分かっていない、自分に何が必要かも分からないのです。しかし、自分の思いで生きていきたい、自分の人生の主人は自分だと思いたい、現代に生きる私達はそれが最もよい生き方だと信じて疑いません。学校でも社会でもそう教えられます。ですが、自分を主人とする人生の実際はどうでしょうか。自分や他のすべての人の命を喜び生きることができているのでしょうか。自分の欲望に囚われ、自分も他者も十分に愛せないでいるのが、我々の現実ではないでしょうか。私達は弱いですから、他者を愛そう…と思っても様々な障害が現れると力尽きてしまう事はしばしばあります。また、他の人の罪に深く傷つき、怒りと悲しみに囚われ、相手を傷つけ返し、罪を犯す事もあります。また、いつもいつも、弱い人、乏しい人のことを自分の事のように思えないものです。自分に余裕がなくなれば、人を愛する事を容易に放棄します。それはこの世の有様を見れば明らかです。人々は豊かな生活や名声、地位を得る事を第一に、自分の道を邁進しています。しかし、この社会から幼児虐待、老人虐待、セクハラ、パワハラはなくなる。強い者は弱い者を思いやることは少なく、一度罪を犯した人を受け入れる社会でもありません。外国人には冷たく、人々は豊かな生活を求めて消耗しています。この歪んだ社会構造の中で、弱い立場、貧しい立場に陥るとなかなか這い出ることはできない。たまたま、恵まれた環境に生まれ育った人々は、それが自

分の生来の特権だと勘違いし、悲惨な環境に生まれ育つ人々に深く同情する事も少ないのです。また、裁くだけではこの世は変わらないとわかっている良心的な人々でも、人間にはこの世界を変えるほどの愛はない事を知り、ため息をついて諦めています。人の傲慢という罪が支配する世界、私達人間が、自分たちの生きたいように生きた結果です。

## 8 死を超えて導く主

だから、主イエスは仰います。「24 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。」自分の思いで生きる、自分の道を歩む、そんな私達の生き方を、主は、はっきりと、「それは滅びへの道です」と仰っています。

ですが、「自分の意思で自分の道を切り開いて成功し、何不自由なく愛し愛されて生きる方もいるじゃないか」と反論する方もいらっしゃるでしょう。そんな幸運に恵まれた人も確かにいます。ですが、その人にも死ぬ時が来ます。肉の命が尽きる最後の時、人は究極の孤独です。どんなに恵まれた一生で、多くの愛する人に囲まれた人生であろうともです。その最後の時、人間が何も持てない時、私達が普段は気づかない人間の命の生身の姿が現れます。その時、自分の意志で勝ち取ったお金も社会的地位も、なんにもかも全く役にたちません。「自分はいったい何のために生きてきたのか」と呻かざるを得ないのです。人間が自分の思いで歩んできた道、自分の道の果てる先は、奈落の底に通じる崖。人は深い崖を落ちて滅んでいくしかないのです。それが、「25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。」という言葉の意味であります。

ですが、イエスをキリストと告白し、イエスに従って生きていく道は、死を超える命への道だと主は仰います。私達一人一人を最後の一息まで確かに導く主イエスに対して、私達の魂は死の間際にあっても、呼び求めることができます。イエス様は必ず私達を助けてくださいます。そして、御手をもって導き、死を超えて永遠の命の道を歩ませてくださるのです。それは主がメシア、救い主、神の御子だからです。

ペトロの「神のメシアです」という告白は、「あなたに従って歩む道こそ、永遠の命への道、私の歩む道は、あなたの道以外ありません」という意味になります。主イエスの道こそ、命への道なのです。この告白をこそ、ここに集められた私達の告白としたいと願います。

## 9 日々の生活

さて、ルカは、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」とイエス様の言葉を記しました。この

「日々」という主の言葉を書き記したのは、福音書貴記者の中でルカだけです。毎日の生活の中で主イエスに従っていく事こそ命の道であると、彼は強調しています。私達人間の中には、どうしても自分達が神でいたい…という思いが本能として組み込まれているようです。神を礼拝せずにいると、自然と気づかぬまま、自分が神となってしまう、自分の道を進みたくくなります。命への道を逸れているのですが、それに気づかないのです。

私はまさに最近、その事を経験しました。私はある牧師の言動に強く憤り、怒りに囚われました。彼を審き、有罪判決をくだしました。そうして、私はキリストの道を歩んでいるつもりでいました。ですが、ある時、彼だけではない、私もまたキリストの道を見失っている事に気づかされました。彼の言動に問題があるのは事実ですし、それを彼に指摘したのも悪いことではありません。しかし、私は、憤りのあまり、彼もまたキリストに愛され、キリストがその身を十字架に裂いてまで救おうとされた人である事をすっかり忘れていたのです。そうして、「あなたの罪は非常に重い」と、彼に十字架を背負わせる事に必死になり、自分の十字架を背負う事を忘れていたのです。更に、十字架を背負わない彼に対し、「あんな奴、いなくなればいいのに！」とさえ思いました。十字架の前に額き、今日の聖書箇所と再び向き合う事を許された時、ようやく、人を裁いて自分の十字架を担っていない傲慢な姿、深い罪の姿を示され、「イエス様、ごめんなさい」と謝罪し、主イエスの十字架のもとへと立ち帰ることができました。怒りから解き放たれ、キリストによる自由を感じました。

私達人間は、イエス・キリストから離れると、知らず知らずのうちに、イエス・キリストの命の道からずれてしまう者達です。だからこそ、毎日、私達をこよなく愛する義なる神を神として崇め、礼拝し、祈りを捧げ、聖書の御言葉から導きを得、時には悔い改めて軌道修正する必要があるのです。

## 10 主の祈り

そうは言っても私達は様々にやらねばならない事があります。仕事がある方、家事を担っている方、また、介護している方もいらっしゃる。病を負っている方もいらっしゃいます。礼拝するまとまった時間が取れない方や体力に限界がある方もいる。ですが、「主の祈り」を日毎に捧げる、それだけでも、ささやかな礼拝となり、軌道修正となります。ですが、主の祈りを漫然と呪文のようにお経のように唱えるだけでは、礼拝にはなりません。魂を注ぎ込み、自分が今、天地万物を造られた神のみ前に出ていることをイメージしつつ、祈りを捧げること、礼拝する事が肝心です。

主の祈り全てが重要ですが、神を神として礼拝するには、特に次の一節は最重要ポイントだと思います。それは「御名を崇めさせたまえ」です。「崇める」というもとの言葉は、神を大きくし自分を小さくするのです。「私はあなたに造られたもの。み前では小さな小さな取るに足りない存在です」という現実を

受け入れ、神を神として大きくし、自分を小さくする。自分を小さくすると、自分の中に大きな余白ができます。その余白を神の義なる愛、キリストの十字架の愛で満たしていただく。このことをイメージしながら、主の祈りを捧げること、それは立派な礼拝行為であります。礼拝とは自分を小さくして、救い主を受け入れ、自分を聖めて頂くことだからです。そうして私どもに注がれる神の愛を全身で受け、この愛に私達の日々を支配していただく時、私達にキリストの命の道が見えてきます。主イエスの命の道、神の愛が現れる喜びの道を、祈りつつ、感謝しつつ歩むことができるのであります。キリストに従いゆく命の道を、横浜ナザレン教会のお一人お一人と共に歩み、そして神の国に生きる喜びを多くの人々に宣べ伝えたい、そのような教会でありたいと切に願う次第です。